



「生きたセミナー」として、その取り組みが注目される

九大と福岡市薬が育薬セミナー開催

福岡市薬剤師会は、九州大学大学院薬学研究院臨床薬学講座との共催による「育薬セミナー」を昨年六月から毎月二回開催している。同セミナーは、九大薬学部をサポートを受けなが

ら、「処方チェック・ヒヤリハットコーナー」「クローズアップ新薬コーナー」等の開局薬剤師自らが発表の場を持つなど「生きたセミナー」として、その取り組みが注目されている。

澤田九大教授が中心に

育薬セミナーを企画する福岡市薬剤師会副会長の末田順子氏は、「もともとは福岡市薬剤師会内の二支部によるフーマコキネティクス研修会としてスタートした」と言う。平成十三年六月から新しく福岡市薬と九大の共催の形で「育薬セミナー」が発足した。

医療事故など実際の調剤業務の現場で起きたケースを挙げる「処方チェック・ヒヤリハットコー

長崎や広島からも参加

この育薬セミナーには、遠く長崎や広島からも参加者が訪れる。研修会は毎月第二、第三木曜日の午後七時から九時まで行われる。最初の「処方チェック・ヒヤリハットコーナー」は、全国ネットや福岡市薬会員から寄せ

られた、日常業務において遭遇した「処方チェック、疑義照会、投薬ミス、ヒヤリハット」などの事例を澤田教授らが詳細に分析。参加者全員で「どうチェックするか」「どう問い合わせるか」「なぜ起こるのか」「どう防ぐ

か」などの項目を積極的に議論し合う。これは日々の「処方チェック、調剤、服薬指導」などの業務を一層充実したものにするための自己研鑽コーナーで、毎回三例ほどの事例を紹介している。続く「クローズアップ新薬」コーナーは、澤田教授らのサポートを受けながら、開局薬剤師自ら

でプレゼンテーションを行う。このなかで、個々のテーマのまとめ方、プレゼンテーションの技法、ディスカッションの進め方、問題解決の方法などの能力を研鑽していく。

解を深める「クローズアップ新薬コーナー」の二部構成となり、毎回、六〇人近い参加がある。両コーナーとも薬剤師として薬学的知識、技能、態度の充実を目指したものだ。

「育薬」とは何か。従来から「薬の創製」としての「創薬」に対して、市販後における最も重要な薬剤師の業務として「医薬品適正使用」が使

われてきた。「より適切な使用方に関する情報を得ることによって、より有効で、より安全な使用方に関する情報を増やす」というイメージが、「育てる」という感じに近いことから、「育薬」という言葉を使用している。この「育薬」という言葉を提唱し、同セミナーの中心的役割を担っているのが九州大学大学院薬学研究院臨床薬学講座の澤田康文教授である。

末田氏は、「長年にわたる、薬剤師は新薬を創る努力は惜しまなかつたが、薬を育てる努力はしてきたのだろうか」と疑問を投げかける。ソリブジン事件を例に挙げ、「有効な薬剤だったが、結局、薬剤師や医師の相互作用のチェックミスにより、消えてしまうのは悔しい」と語る。今後の薬剤師は薬を育てていく必要がある、チェックしていくことが必要と訴える。

全国的取り組みを期待

ナー、新薬から薬品情報を最良にして定量的な理

セミナーのタイトルである「育薬」とは何か。従来から「薬の創製」としての「創薬」に対して、市販後における最も重要な薬剤師の業務として「医薬品適正使用」が使

一年から試験的にインターネット上で運用し、登録薬剤師数が九〇人以上となる薬剤師間情報交換・研修システムに寄せられた実例をピックアップしたものの「育薬セミナー」での勉強のプロセスから研究のシーズを発見し、育てることでインパクトのある研究成果を挙げ、これを学会などで発表できると言う。こうした取り組みが、薬剤師間の情報ネットワークとして、薬学部が中心となり、全国的に行われることを期待したいと語る。